

論文要旨

# 語形から意味へ

機能中心主義へのアンティテーゼ

三枝 令子

## 基本的な考え方

語とは何かという問は重い。辞書を作るためには、語の取り出しが必要だが、どう取り出すかという問題はそのまま、その言語の文法をどう考えるかという問題につながっている。日本語は分かち書きをしないから、普段、人は語の切り出しに頭を悩ませないが、日本語をローマ字書きしようとすれば、語をどのように分けて書くかは大きな問題である。単語で区切るのが自然だが、その単語の区切りが判然としない。たとえば、接辞を独立した語として分けるのか、活用形はどこまでひとまとまりと考えるのか、といった点で迷うことになる。ここでは、語とは、自立語、付属語を問わず、意味を持った最小の音形と考える。この場合、接辞と助詞を語とすべきか否かが問題になる。ローマ字書きする時には、「お父さん」は「o too san」とは書かないわけで、本論でも接辞を語とは呼ばないが、「前社長」と「前者」の「前」の違いにも示されているように、語と接辞とは連続的である。助詞については、接辞を語としない基準から言えば助詞も語とは呼べない。実際、鈴木重幸（1972）は、助詞を名詞につく「格のくっつき」（同 201）として扱っている。鈴木はくっつきのついた形、たとえば「ぼくを」「家から」を名詞の文法的な形としている。しかし、一般には助詞という品詞をたて、助詞を語と認めている。小泉保（1978）はその基準として、「分離性」と「交換性」をあげている。「分離性」とは、「山からが」のように「山」と「が」の間に他の語を挟むことができることをいい、「交換性」とは「山からだ」「山だから」のように二つの形式が位置をとりかえて現れることをいう。助詞がこうした自由形式を持つことから、小泉は助詞に語としての独立性を認めている。また、「桜の木を植える」は、「（桜の木）を」という構造であって、「（桜の）（木を）」とは考えられないから、助詞は語として独立させた方がより一般性のある説明が可能となる。語は置かれる文脈によって異なる性格を示すので、語の認定は画然としたものにはなりえないが、本論では、文法を考えるにあたって、最小の音形である語を出発点にする。

筆者は、言語の伝達面を重視する機能的な言語観を否定するものではない。言葉が文脈の中でどのように機能しているかを考えずに、言葉の意味はとらえられない。しかし、1970年代に始まった Communicative Approach は、言語学習、教育はコミュニケーション能力の獲得を目指すというそれ自体は妥当な目的の中で、言語形式の正確さより伝達することを重視する面がある。文法項目を暗記しただけで言葉が使えるようにならないのは、言葉は場面の中ではじめて意味を持つということであり、その場面への洞察が不可欠だからである。しかし、言葉の機能を並べあげて片端から学んでいくだけでは、その語を構成要素とするほかの語との関連性がかみにくく、汎用性に欠ける。日本語を機能的に理解するためにも、語形とその構造の理解は不可欠である。言葉の意味がわからない時、あるいは、言葉の意味

を人に説明しようとする時、我々は、自然、それがどういう語から成り立っているのかを考える。また、語源は何かということを考える。語源を調べる時に、語形を無視することはできない。実際の用法の説明も有効であり必要だが、それだけではわかった気がしないことが多い。その語を構成している論理関係がとらえられてはじめて、腑に落ちると言ったらいいだろうか。

本論の基本的な考え方は、語形をよりどころに言葉の意味、機能を考えようとするところにある。我々が言葉について考える時、語形を頼りに考えを進めていくことは自然で無理がない。そして、できるだけ語形に即してその意味を考えようとするれば、語の成り立ちにも必然的に目を向けざるを得なくなる。また、同じ語形であっても異なる機能を持つために別の語として扱われているものについて、本当にそうなのか一度は疑ってかかることになる。こうしたプロセスの中で、語形の共通性から意味の連続性、時には体系性が見えてくると考える。

## 第1部 語形の持つ陳述性

### 第1章 活用形の陳述性

まずはじめに、日本の文法論におけるこれまでの陳述の考え方を振り返った。もともと Modality の概念は、直説法、仮定法、命令法という法の特性を意味していたが、一般言語学においても、ムードの概念を従来の法の特性とするのではなく、いわば「ことがら」と「述べ立て」といったそれまでとは異なるとらえ方をしていることがわかる。翻って日本語を考えてみると、日本語では法と活用形の区別が厳密ではない。むしろ法を動詞の活用形と考えるのが普通である。「書く」と「書いた」はともに直説法であって、活用形の異なりだから、「書く」「書いた」の違いを法として扱うことはできない。また、日本語の「書けば」「書け」は「書いた」と同様、「書く」の活用形の違いととらえるのが自然である。すなわち、日本語では、法が英語の場合のように構文的に区別されるのではなく、活用形の中にテンスもモダリティも含まれていると考えられる。しかし、日本語の文法論では時代が新しくなるにつれて、陳述は活用形の問題でもなく、むしろ、動詞の後に付加される叙述表現の問題ととらえられ、それに伴って名称を陳述からモダリティに言い換えている。それと同時に、活用形自体がもっている陳述性は考慮されることが少なくなっているように見受けられる。もとより、同じ活用形でも陳述度の違いがあることについて言及した分析がないわけではない。三上章（1953）は、同じ「書く」にも、陳述度がゼロの不定法と陳述度が1の文末終止法とがあり、かつ両者は離散的ではなく連続的な存在であることを指摘している。本論では、動詞の言い切り形の、三上の言う陳述度が1の場合を叙述

形, 陳述度がゼロの場合を概念形と呼んで区別し, それがどのように文の中にあらわれているかを観察した。この区別によって, 「彼は歩くのに杖を使う。」と「彼は歩くのに彼の息子は車を使う。」という, 従来「目的」と「逆接」と呼ばれている用法の違いが, 「の」の前の陳述度によって生じていると説明することができる。

## 第2部 語形から機能を知る

### 第2章 「ので」「のに」「だけで」「だけに」の分析

2章では, 語形の共通性に注目することによって, 従来別の語として扱われてきたものが実は同じものであり, その違いは, 語形の違いから引き出されることを論じた。具体的には「ので」「のに」「だけで」「だけに」の四語を取り上げた。この四語を取り上げたのは, 次のように, 形と意味に共通するところがあるためである。

- (1) 外国へ旅行するので, まとまった金が必要だ。
- (2) 外国へ旅行するだけに, まとまった金が必要だ。
- (3) ちょっと旅行するのに, そんなに金が必要か。
- (4) ちょっと旅行するだけで, そんなに金が必要か。

まず, 「で」と「に」はともに「だ」の連用形とも考えられることを述べた。助詞か助動詞かを区別するのは構文と考えられるので, 「ので」を含む句が主文の述語の格成分になりえない時には, 助動詞的性格が強い。「のだ」の連用形と考えられる「ので」は, 前件の客観性のある事態に引き続いて後件の事態が生じることを表しているのだから, いわば「こういう状況で」という順接の意味を持つことになる。一方, 「に」は後件の事態が成立する場面を示す意味合いが大きい。「の」と「だけ」では, 「だけ」は「丈」が語源と言われ, 名詞性が強い。「の」には, 1章で述べた概念形と叙述形を受ける場合とがあり, 名詞代用の「の」は概念形, 叙述全体を受ける「の」は叙述形を受けていると言える。「ので」節と「だけで」節を比べれば, 「ので」節の前では述語を丁寧体に変更することが可能で, 述部に叙述性がある。「のに」には, 大きく「見るのに金が必要だ」と「見るのに見えない」という目的と逆接と呼ばれる用法があるが, この違いは, 前者は前件が動作文で動詞の言い切り形現在しか来ないこと, 後者は, 前件後件に対比的な要素があることによる。

「だけで」は, 「だけ」の限定の意味を持つことから, ほかの要素の存在を前提にしない因果関係を表す場合には成立しにくい。「だけに」は「のに」と同様, 用法に幅があるが, 基本的には「あなただけに教える」と「環境保全が叫ばれているだけに 活発な議論が

あった」の二つの用法に代表される。前者は、目的語を限定し、後者は、後件の成立条件を一つのことごとに限定するために、後件との結びつきに当然の意味が生まれ、その結果、主節との関係に理由の解釈が生じると考えられる。

### 第3部 語形の体系性 「って」の分析

#### 第3章 「って」の構文的位置づけ―「と」による引用と「って」による引用の違い

第3部では、話し言葉でよく使われる「って」を取り上げ、「って」が①用法の広がりを持つこと、②語形変化の体系を持つことを、四つの章にわたって論じた。まず3章では「って」という語形に、「来てくれないってひがむ」と動詞に接続する用法、「せがれが嫁もらおうって年になった」という連体的用法、「自転車に乗るっておもしろい」という提題的用法、「そう言うなって。」という文末用法があることを、似た用法を持ち語源的にも共通する部分のある「と」と比較しながら論じた。「と」にも格助詞、副詞成分、引用、接続助詞と、さまざまな用法があるが、実は連続した用法であり、そこに共通するものは「と」が名詞に接続する場合はもとより陳述性を持つ語句、文に接続する場合においても、「と」によってその陳述性が失われ、「と」節は想念を表すということであった。それに対して「って」は引用の意味合いを失わない。「と」と異なる「って」の働きと意味を考えるにあたって、①「って」が連用形の形をとっていること、②連用形の前に促音が置かれること、の二点が重要と考えた。すなわち、「って」が連用形という形を取っているために接続の仕方の自由度が大きく、連用形の前に促音が置かれることは発音上は声門の緊張と閉鎖によるポーズを意味し、「って」の前の述語に陳述性のあることが示されると考える。こうした点から、「って」が「と」とは異なり、陳述表現をそのまま主文に引き込む働きを持つことが説明できる。

#### 第4章 「だって」「たって」の本義とその用法の広がり

4章では逆接と呼ばれることの多い「たって」「だって」について、語形を出発点としてその用法を観察し、引用、逆接、終助詞的用法、さらには接続詞という用法の広がりがあることを論じた。引用と逆接を異なる用法と考える立場もありえるが、本論では、①「引用」「条件」ともに「とて」が起源と考えられること、②語形と意味に共通性があること、③どちらも係り助詞へと変化し、変化に平行性のあること、から同一語形が構文的条件によって異なる用法を示していると考えた。

「だって」という形は、たとえ主語が示されていなくても「～が～だ」という名詞述語文を構成している。「子供って いろんなことに興味を持つ。」と「子供だって いろんなことに興味を持つ。」では、前者は単に名詞の概念を取り立てているが、後者では前

に来る名詞の持つ属性を取り立てると同時に、独立した節として後件に係っていく。接続詞の「だって」には「A: どうして寝ないの? -B: だって, 宿題終わってないんだもん。」という人に逆らう用法と、それに相反するような「A: ごめん。遅れちゃった。-B: だって, 今日学校あったもんね。」という共感を示す用法とがある。後者の用法は、「だって」の話し手が対話相手の側に立って、ともに外側の状況と向き合うと考えれば両者を統一的に説明できること、また、「だって」は相手の言動に対して発話されるというより、相手が問いたださずにはいられなかった「だって」の発話者の言動に向けられることを述べた。文中の「たって」「だって」と、接続詞の「だって」とはその意味において基本的に同じものだと言える。また、「たって」「だって」に意味、用法において近い「ても」「でも」は、連用形に接続し添加の「も」を構成要素とすることで例示の意味が強い。

### 第5章 提題の「ってば」「ったら」

5章では、「言う」の条件形である「ってば」「ったら」が「って」と同様に引用の意味、働きを残しつつ提題や終助詞としても使われることを観察した。提題の「って」「ってば」「ったら」では、後件が人や事物の属性を言い表す状態性の述語となっている。前に接続する語は、第三者およびことがら、話し手、聞き手に分けられるが、「珠美 ったら 無茶言わないでよ」と聞き手を受ける場合には、マイナス評価の文の来ることが多い。提題の「って」「ってば」「ったら」は、いずれも言語コード自体について語る働きを持つ点が係り助詞の「は」「なら」と異なる。「は」の働きが既知情報からのとりだし、「なら」は既知情報からの条件付きとりだしであるのに対して、「って」は新たな情報をとり入れていく過程で用いられる形式だと言える。

### 第6章 「って」の体系

第3部最後の6章においては、①引用、②話題の引き込み、③反復、④伝聞、⑤言いつけ、⑥問い返し、⑦強調に分けることのできる「って」のさまざまな用法が、①「って」で受ける句の発話者が誰であるか、②引用句末に「だ」の付加が義務的であるか否か、③主文の述語の有無と、また述語が必要な場合その述語の性質、④「って」の省略の可否、という四つの条件によって区別されることを論じた。一方、逆接の「って」は、①逆接、②主題の添加、③反発、の三つに分類できる。添加の「も」を構成要素に持つ「ても」「でも」が並べ立ての意味を基本とするのに対して、「たって」「だって」は「とする」の条件性と「だ」という言い切り形の陳述性から、一方で係り助詞的な働きをし、一方では反語的な逆接の働きをする。

全体を通して明らかになったことの一つは、もともとは動詞を内包する「って」が、片や接続詞、片や終助詞へと大きく分化し、それとともに陳述性を帯びていく点である。この変化は、一方で述語により近い助動詞を経て、陳述だけを担う終助詞への分化であり、また一方で、これまた述語性を持った接続助詞から接続詞への分化である。渡辺実(1974:

52) は、終助詞について「文末近くに現れるものほど、また文頭にも現れやすい」として、「ねえ、母さん、五時に出発だったね。」「よー、元気そうじゃないかよ。」という例をあげている。終助詞だけでなく接続詞にもこの変化は見られ、文頭で聞き手の発話を受ける「だって」と、文末で「明日は雨が降るんだって。」とこれまた他者の発話を受ける「だって」は意味的に共通する。また一方で、「って」の述語の主体が一般化することで「って」は係り助詞に近づく。こうした語形の観察から「って」の連続性が見てとれる。また、引用、話題の引き込み、訴えかけの「って」には、ほぼ同じ意味で「ってば」「ったら」あるいは「ったり」という形がある。これら「って」「ったり」「ったら」「ってば」「ったろう」という語形は、使役を表す $-aseru$ や受身を表す $-areru$ が活用するのとよく似て、「って」が全体として一つの語形変化の体系を持っていることを示している。なお、文中から文頭文末に行くにしたがって各用法のモダリティ性が高くなると言えるが、そのモダリティ性は、文頭では先行文脈との関係づけがなされ、文末では聞き手の伝達態度が示され、異なるモダリティを示すことになる。

#### 第4部 語形の持つ機能の連続性

##### 第7章 話し言葉における「が」「けど」類の用法

7章では、「が」「けど」の用法を観察した。「が」「けれども」は「スキーはできるが、スケートはできない」といった逆接用法だけではなく、「すみませんが、・・・」や「いいんじゃないですか。よくわからないけど。」といった逆接を表さない用法も持つ。話し言葉の資料分析からわかったことをまとめると、次のようになる。

①総数約1500のうち、「けど」の使用が65%を占め、圧倒的に多い。それに続く「が」でも14%にすぎない。②接続助詞と呼ばれてきたが、「けど」は、発話末、談話末でもよく用いられる。③「が」「けど」「けれども」は男女の使用頻度に大きな差は見られないが、「けども」はもっぱら男性が用い、「けれども」は女性が用いる。④文中で、「が」は普通体を受けることが多く、「けど」「けども」は「です体」「ます体」に接続することも多い。文末が丁寧体の場合、文中の「が」は丁寧体を取り、「けど」類は普通体の場合も半数近くあった。しかし、文末が普通体であっても文中で丁寧体が使われることもあり、話し言葉においてはスピーチレベルシフトが頻繁に起こっている。⑤これらの助詞とともに用いられる述語には、「と思うけど」「条件形+いいけど」といった話し手の判断を控え目に述べる表現、「ある」「いる」「と言う」といった客観的な叙述表現が特に多い。⑥「が」が直接形容詞に接続する例はなく、イ形容詞に接続するのはほとんどが「けど」であり、その場合「んですけど」という表現が用いられる。

「が」「けど」類の基本的な意味を「異なる側面があることを示すこと」かつ「後続節焦点化」と考えた。従来の逆接という解釈は「けど」類の機能の一つにすぎないと考える。

「が」「けど」類の意味、用法については、大きく、①前置き、②対比・逆接、③言い切りの回

避,④注釈,の四つに分けられることを述べた。「が」は,格助詞の「が」が出自と考えられるが,石垣謙二(1944)は「思ふが悲しさ」という上代の例が,平安期には「程なく籠りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るな(天の羽衣)」と変化したことについて,「が」が接続助詞として使われるようになったのは,主格の「が」が用言を承けるようになったこの時に始まると述べている。「けど」類は,もともと条件を表すものであったが,近世前期に活用語一般の終止形に下接するとともに,接続詞としての用法も現われる(土井洋一(1969:415))ということから,現代における「が」「けど」類の様相は,この陳述形を受けるに至った時から始まっていたのだと考えることができる。

なお,本章では生の会話資料を用いて「が」「けど」類の用法を観察した。その際,これまで日本語文法において重要な指標の一つとされてきた三尾砂(1942)の丁寧化百分率がうまく適合しないという結果になった。その大きな理由は,実際の会話ではさまざまな条件が働いており,終結部が普通体の文であっても,文全体のスタイルが必ずしも普通体にはならないためである。普通体,丁寧体間のシフトもあれば,そもそも述語で言い終わらない文も多い。しかし,実際の発話において中止,中断や倒置が頻繁に起こるものであるなら,これまで接続助詞とされてきた「が」「けど」類が,中核的な意味を持ちつつ文のさまざまな位置で,したがって接続助詞という品詞にとどまらず機能するのはきわめて自然なことだと言える。

## 第8章 「だ」が使われるとき

8章では,「だ」について,これが述語要素であるとともに,きわめてモダリティ性の高い語であることを論じた。書き言葉においては「だ」は名詞述語文の構成要素として必須だが,話し言葉ではむしろ「だ」が必須の場合は限られている。すなわち,一部の接続詞,例示の機能を持つ「だの」「だか」,そして接続助詞が続く「だし」「だが」等である。話し言葉では,文末の言いきりの「だ」は,話し言葉の持つ現場性に支えられて,統語的には義務ではなく,命題に関わらないという点でモダリティ性が高い。このモダリティ性にはレベル差がある。すなわち,自分自身に向けた発話か他者に向けた発話かという違いがあり,自分自身に向けて「だ」を用いる時には,「もうだめだ。」「あつた!これだ!」といった,感情の吐露,非難,発見,思いあたりの用法があげられるが,この時「だ」の他者に向けた伝達のモダリティは発動されない状態にある。言いきり形で自分自身に向けた発話は,男女ともに用いる。しかし,言いきり形で他者に向けて発話する場合には「礼だ,礼をしろ」や「どういふことだ」といった主張,宣言,命令,疑問,問い返しの用法が多く,もっぱら男性が用いる。命題の主要な構成要素である名詞述語の「だ」が,「それにだ・・・」のように間投助詞的に使われたり,「ざまあみろ,だ。」のように文相当の句を受けるのは興味深い。こう



した点から「だ」はモダリティ性が高く、かつ、文において必須の要素とは言えない。日本語の名詞述語文は、話し言葉においては「XはY。」でも意味は通じ、文末が述語で終止しないことも多く、また「XはYだ。」と「だ」で言い切る文は女性に普通用いないことから、日本語の名詞述語文の基本形は「XはY。」とも考えられる。

## 第5部 品詞の間の連続性

### 第9章 品詞のさまざまなふるまい

最後の第5部9章では、名詞、形容詞、動詞と名付けられたそれぞれの品詞に属する語が、その意味素性と構文によって異なるふるまいを見せる、そのありようと条件を見た。名詞にはもともと名詞的性格しか持たない語、形容詞的性格を持つ語、動詞的性格を持つ語、副詞的性格を持つ語があり、それが構文によって形容詞的ふるまいや副詞的ふるまいをする。措定文の名詞述語は形容詞的にふるまい、「事実」「勢い」「結果」「実際」は、名詞でありながら副詞的にふるまう。さらに、「行くに違いない」「笑いに笑った」といった動詞の名詞的ふるまい、「近くがいい」「多くを語らない」といった形容詞の名詞的ふるまいを観察し、最後にふるまいの異なる同義語を取り上げた。たとえば、「小さな」「小さい」のようにナ形とイ形を持つ語の場合、その心理的な面を取り上げたい時にはナ形が、客観的な面を取り上げたい時にはイ形が使われる。「お父さんの手は大きい！」を連体修飾にしたとき、「大きいお父さんの手」では客観的な叙述にとどまり、「大きなお父さんの手」とナ形を用いることで、その心理的な大きさを表現することができる。さらに、商品名に使われた「まるで梅酒なノンアルコール」といった表現にも、我々が品詞分けという慣習による規範にしたがって言葉を使いながら、その規範をいわば逆手にとって、語に新たな意味を吹き込んでいることが観察できる。

### おわりに

言葉の機能というのは、語形が文の中で果たす役割であって、機能が語形の中にもともと備わっているわけではない。語形が定まっているから機能が明確になる。ある語がどのような機能を持っているかを問う前に、どうしてこの語形がその機能を担うことになったのかを考えたい、というのが本論の意図するところ、出発点であった。現在、統語論の研究がさかんに行われているが、語形との関わりがもっとかえりみられてもいいように思う。本論でとりあげた「だ」は、日本語の判断を示す判定詞として命題を構成するきわめて基本的な述語であるが、それが文頭で「だって」という接続詞の構成部分として命題の外で用いられる、と同時に、文末で「へーんだ」と終助詞のようにも働くという興味深い

ふるまいをする。また、接続助詞の「だって」から接続詞の「だって」は成立していると考えられ、両者の関連性は明らかである。「が」「けど」類については、文中で接続助詞として働く割合とほぼ同じくらい文末で言い終わりに使われていることが示された。また、生の会話資料を観察すると、そもそも文中、文末という区別がさほど意味を持たないことがわかる。本論で観察した「って」もまた用法の連続性を持っている。もともとは省略形だが、その省略の段階にもさまざまなものがあり、また、「行くって話」といった本来テ形が接続しない名詞にも接続するというかなり自在なふるまいをする。しかも、そうした用法全体が一つの整った体系をなしているという事実が観察できた。動詞の活用形と対応するように「って」が変化する形を持っているということは興味深い。しかし、考えてみれば、意味の連続性、語形の体系性は言葉にとって当然のこととも思われる。文法家は語の用法を把握しやすいようにさまざまに分類を行うが、言葉を使う人が分類にしたがって発話しているわけでもなく、そのような分類を必要ともしていない。言葉が意味の連続性、体系性を持たなければ記憶負担が大きすぎて使いこなせないという側面もあり、人は自然に、あるいは、意図的に、その語の使われ方から中核的な意味を引きだし、それを場面の持つ条件に合わせるように変更を加え使っている。本論は、語形がどういう意味を持つかにこだわって、言葉のあり方の一つの側面を示そうとしたものだと考える。

## 引用文献

- 石垣謙二 1944 「主格「が」助詞より接續「が」助詞へ」『國語と國文學』21 卷 3-4 號（服部四郎・亀井孝・築島裕 1981 『日本の言語学 第7巻 言語史』所収）
- 小泉保 1978 『日本語の正書法』大修館書店（1996 第3版を使用）
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 土井洋一 1969 「第2章接続助詞十 けれども＜現代語＞」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社（6版 1987を使用）
- 三尾砂 1942 『話言葉の文法』帝国教育会出版部（『話言葉の文法（言葉遣篇）くろしお出版 1995を使用）
- 三上章 1953 『現代語法序説』（1972年復刊, 1987年版使用）くろしお出版
- 渡辺実 1974 『国語文法論』笠間書院